国際協働学習

iEARNレポート

2023年度

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構（JEARN）

2024年6月1日発行　ISSN 2434-0049（オンライン）

国際協働学習iEARNレポート（2023）　目次

番	題　名	所　属	報告者代表氏名	頁
	プロジェクト実践編			1
1	グローバル・デジタル時代の国際協働学習 ー地球市民としての協働学習ー	JEARN中部センター 防災世界子ども会議	廣田　元子 納谷　淑恵 岡本　和子	2
2	The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project ーパリ2024に向けて教師協働への取り組みー	文京学院大学	滝沢麻由美	5
3	Machinto – Hiroshima/Nagasaki for Peace ー今、この時代に広島・長崎が語り継ぐことは何か ー	iEARN/JEARN	高木　洋子	8
4	GOMI on EARTH ーゴミの長い旅ー	iEARN/JEARN	高木　洋子	10
	中学校実践編			11
5	中学生の世界を広げるCOIL型教育の展望 ーGOMI on ERATHのプロジェクトからー	仙台市立 上杉山中学校	若生　深雪	12
	高校実践編			16
6	Girl Rising Projectの実践 ー「女性の人権」と「質の高い教育」を目指してー	Girl Rising Project 啓明学園中学校高等学校	関根　真理	17
	大学実践編（含Youth　Project）			20
7	Youth facilitator 実践の学び	青山学院大学	岡田　麻唯 勝又恵理子	21
8	オンラインコミュニケーションスキルのための教材開発	金沢星稜大学	平本　美鈴 清水　和久	23
9	大学生による小学校国際協働学習の支援の方法 ーユースプロジェクトとしての関わりー	金沢星稜大学	清水　和久	27
	その他のプロジェクト			31
10	ANNE FRANK Meet and Learn	iEARN/JEARN	高木　洋子	32

https://jearn.jp/iearn-report/index.html

ISSN 2434-0049

プロジェクト実践編

グローバル･デジタル時代の国際協働学習

～地球市民としての協働学習～

廣田　元子　JEARN 中部センター代表
納谷　淑恵　防災世界子ども会議代表
岡本　和子　防災世界子ども会議創設者

防災世界子ども会議（NDYS）は、アイアーン大正琴プロジェクトや外部団体である琴リンピック実行委員会などと協働することにより、より広範な人々を対象とした地球市民としての協働学習を実践している。本稿では、NDYS の国際協働学習プログラムの一つとして、プロジェクトを実践している大正琴プロジェクトに焦点を当て、NDYS と大正琴プロジェクトのコラボレーションにより、地球市民としての協働学習をいかに実現しているかについて述べる。

キーワード　　大正琴プロジェクト　　防災世界子ども会議　　琴リンピック　国際協働学習

1. はじめに

アイアーン大正琴プロジェクトは2009年に名古屋の小学生を対象にスタートしたプロジェクトである。当時「防災世界子ども会議」の事前学習に参加していた小学生たちが2005年（兵庫淡路島）2006 年（台湾・高雄）と国際会議に参加し、2007 年には自分たちの地元での（愛知）開催にも参加した。

子どもたちは、事前学習やネットによる国際交流を進める中で、交流国との最近流行の曲や童謡などの音楽交換交流がきっかけとなり、音楽教師だったプロジェクトリーダーが被災後の「心のケア」として名古屋で発明された「大正琴」を国際交流楽器として「世界に広げよう」と活動を開始した。

準備を経てプロジェクトとして海外活動を開始したのは 2010 年「iEARN カナダ会議」からである。アイアーン世界会議に出席してワークショップと演奏発表、世界の学校や、先生たちに大正琴の贈呈をおこなった。インターネットで演奏方法や曲の紹介、アイアーンテレビ会議システムを使っての大正琴練習会。アイアーンだけでなく、外部団体のイベントに参加したり、交流校訪問をしてワークショップや演奏発表をしたりして世界の子どもたちや先生たちと交流を深めた。

２．目的と方法

2-1 目的

アイアーン大正琴プロジェクトの目的は、被災後の「心のケア」として、名古屋で発明された「大正琴」を国際交流楽器として「世界に広げよう」というものである。

図１ 防災世界子ども会議に参加の
JEARN 中部センターはづっ子カウボーイ

防災世界子ども会議は、持続可能で災害にレジリエント（強靭）な国際社会に貢献するために、３つの主要なプログラムを通じて国際協働学習をすすめている。

① グローバル災害安全マップ作り、②キッズ防災バッグ作り、③音楽による心のケアの３つのプログラムである。誰一人取り残さない防災への取り組みとして、防災世界子ども会議と大正琴プロジェクトの 2 つのプロジェクトが協力しているのが、「音楽による心のケア」で、SDG s 目標３「すべての人に健康と福祉を」に沿ったものである。

地域に貢献する取り組み

はづっ子カウボーイは地域の行事や、高齢者施

設やカフェにも積極的に参加している。

図２　図３　地域の秋祭りに参加

c
図４　高齢者カフェ訪問

誰一人取り残さない防災への取り組み

はづっ子カウボーイのメンバーたちは2024年1 月に２回の「第１回よっかいちジュニアメディカルラリー」事前学習に参加し、救命処置や応急手当を専門家から学んだ。

図５ジュニアメディカルラリーに参加

３月 10 日（日）は災害時におけるコミュニケーション能力や協調性、リーダーシップスキルや総合援助の大切さを競うラリーで、「命の尊さを学ぶ」機会を得ることができた。

図６ジュニアメディカルラリーに参加
https://yokkaichijuniormed.wizsite.com/my-site

2-2 方法

1）実施計画案

2014 年プロジェクトを手伝いたいと「琴リンピック」事務局から申し出があり、海外への大正琴寄贈とプロジェクト演奏発表の支援要請を受けて２年に一度、新潟市で開催される「琴リンピック」の海外交流支援をおこなっている。「世界大正琴交流会　琴リンピック 2024 イン新潟」は８月１８日（日）に開催予定である。8 月 15 日（木）から海外受け入れ「世界大正琴交流会」、17 日(土)リハーサル、カルチャーナイト、１８日（日）「防災世界子ども会議 2024in 新潟」NDYS 宣言文発表、会場展示発表、「世界大正琴交流大会　琴リンピック 2024in 新潟」開催予定。

３．活動内容・研究内容

3-1　具体的な実施内容

防災世界子ども会議は、毎年プロジェクトの成果発表会を行っている。近年は、Zoom による発表会と、実際に集まって発表をする形を隔年で行っている。プロジェクト参加グループは、発表会に向け、それぞれ練習をおこなう。

3-2　具体的な参加者内容

プロジェクト参加グループは、学校単位であったり、複数の学校が協力し合って参加したり、地域の子どもたちが集まってグループを形成して、地域ぐるみで参加するなどさまざまであり、学校の枠を超えたプロジェクトの広がりを見せている。

3-3　具体的な実施内容

発表会はインターネット上の発表会と実際に

集まって行う発表会の２種類がある。
２０２３年を例にあげると、インターネットの発表会をメインに、三重県四日市市の会場に日本の子どもたちが集まり、ハイブリッド形式で成果発表会をおこなった。
参加国は、５ヵ国１地域から７グループであり、マレーシア、インド、インドネシア、ジョージア、台湾、日本であった。

図７Zoom による音楽発表マレーシアの様子

図８マレーシアの発表を聴くはづっ子たち

図９　琴リンピック合宿　お国自慢料理披露
ジョージアの生徒とジョージア代表

図１０　琴リンピックリハーサルの様子

図１１　琴リンピック本番終了！

４．成果と課題

〇成果

アイアーン大正琴プロジェクトでは「大正琴の輪は　未来を拓く　防災の輪」をテーマに活動している。

2010 年からカナダ、アメリカ、台湾、韓国、シリア、オマール、セルビア、オーストラリア、オランダ、タイ等に合計約５０台を学校に贈呈した。

2014 年から「琴リンピック」事務局の協力により、２４の国と地域 389 台を学校や先生個人に贈呈した。その成果もあって、世界中に、大正琴の演奏発表ができる環境にある学校が増え、防災世界子ども会議の発表の後には必ず大正琴を含む音楽発表があり楽しく交流を深めている。また、２年ごとに行われる「琴リンピック」と協力することにより、プロジェクト参加生徒は、琴リンピックに参加する、世代を超えた大正琴愛好家のおよそ５００名の方々に対して防災学習の成果、及び音楽発表を行うことができた。

防災世界子ども会議は、アイアーン大正琴プロジェクトや外部団体である琴リンピック実行委員会と協働することにより、学校という枠を越えたより広範な人々を対象とした地球市民としての国際協働学習を行うことが可能となったのである。

〇課題

防災世界子ども会議は、来年でプロジェクト開始から２０年を迎える。大正琴プロジェクトは、今年で１５年である。今の体制でいつまで継続できるのかが今後の課題である。

参考
https://ndys.jearn.jp/
https://kotolympic.com/

The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project

～パリ 2024 に向けて教師協働への取り組み～

文京学院大学　滝沢麻由美

2023 年度は、まだパリ 2024 開幕まで時間があり数校のみが参加しての活動になったが、特に前半では昨年度からの台湾と都内公立小のオンラインミーティングを含む文化交流、後半ではファシリテーター―である筆者の海外フィールドワークの一環として、ポルトガルとネパールのプロジェクト参加校 2 校を訪れ、訪問授業として現地教員たちと協働しておこなったピース・アクティビティについて報告する。また別の機会で参加したエラスムス・プラス・プロジェクトミーティングで出会った欧州の教師たちからの学びと新しい協働の可能性についても触れる。

五輪・パラリンピック教育　パリ 2024　訪問授業　教師協働　オリンピック休戦

1. はじめに

このプロジェクトは、東京 2020 のために 2016 年から始まった東京都教委の五輪・パラリンピック教育に東京在住の筆者が大きな意義を感じ、その内容の 1 つであった「世界ともだちプロジェクト」の一環として、地域で支援する都内公立小の課外活動で、まずは他のアイアーン・プロジェクト（Teddy Bear Project, Holiday Card Exchange, Hands for Peace, My School Your School）に参加して海外校との国際交流を進めたことから始った。2018 年 6 月のアイアーン国際大会（アメリカ）では、上記の Hands for Peace でブラジル人教員とおこなった「リオ 2016 から東京 2020 へ」をコンセプトにした活動を口頭発表、また五輪・パラリンピック教育を軸とする新しいプロジェクトを立ち上げるためのポスター発表を単独でおこなった。これが 2019 年初めに承認され、この TOPA Project としてスタートした（2022 年度までの共同ファシリテーターは 長谷川早百合氏）。

この後は順調に小中高の参加校を増やし、JEARN Youth Project としては東洋学園大学 児童英語ゼミ（坂本ひとみ教授、会員）の協力を得ながらも、コロナ禍で東京 2020 が延期となってしまった。しかし、当初の予定通りオリンピック開催 1 か月前のオンライン交流発表会 (Zoom) TOPA Global Exhibition (TGE)を海外校 10 カ国前後と日本からの参加で、2020 年と 2021 年の 6 月、さらに北京 2022 に向けて 2022 年 1 月と、期せずして 1 年半余りで計 3 回開催することになり、コロナ禍の中で模索しながらも各国の参加教員と協力関係を作っていった。

この後はパリ 2024 開催まで、今までにはない 2 年余りという大きなインターバルがあったのだが、この報告では 2023 年度参加の数校のおもな活動と、ファシリテーター―である筆者が今までの TOPA 参加校をポルトガルとネパールで現地訪問し、教師協働によっておこなったピース・アクティビティ（「ピース折り鶴」と「オリンピック休戦」）の授業を紹介し、最後に前述の坂本ひとみ先生のご紹介で参加させて頂いたエラスムス・プラス・プロジェクトミーティングで出会った欧州の教師たちから得た学びと新しい協働の可能性について触れたい。

２．目的と方法

2-1 目的

TOPA が目標とする SDGs は次の 3 つである。
No. 3 「すべての人に健康と福祉を」
No.10「人や国の不平等をなくそう」
No.17「パートナーシップで目標を達成しよう」
これに沿って TOPA では、「オリンピック・パラリンピック競技大会、特にオリンピック・パラリンピックの価値、フェアプレー、オリンピック休戦について学ぶことを通して、友情、励ましの精神、多様性の中での団結を育む」ことを目的としているが、北京 2022 パラリンピック直前に起こったウクライナ侵攻が与えた大きな影響から、「オリンピック休戦」について共に考えることのより切実な必要性を感じている。

2-2 方法

1） 実施計画案（2023 年度）

参加校が自己紹介や学校ニュース紹介をしたり、スポーツやオリパラ関連のトピックを投稿しながら、非同期，及び同期で交流していく。

２）内容項目

Schoology でのプロジェクト・スペースの構

成は次の通り：①オリンピック・パラリンピック教育の資料：「オリピック＆パラリンピックの価値（Olympic & Paralympic Values）」「フェアプレイ」「オリンピック休戦」(Olympic Truce) ②フランスのカントリー・コーディネーターからパリ2024についての最新情報を随時アップデート③「自己紹介や最近の学校活動ニュース」（ウェルビーイングに通ずる全ての活動）④ オリンピック・パラリンピックについての学びの活動や成果物

３）評価方法

①台湾と交流した都内公立小では、英語専科教員と外国語支援員（共に会員）が高学年の外国語授業とこのプロジェクト活動を連動させていたため、その授業評価に基づく。

②筆者の現地校訪問授業は、授業案作成時の目標（「内容言語統合型学習（CLIL）」の 4Cs の観点：1）Content: 内 容　２）Communication: 技 能　３）Cognition:思考　4）Community/Culture:協同・文化理解）に沿った質問紙を作成、回収後、その結果の考察から自己授業評価をおこなう。

３．活動内容・研究内容

3-1　台湾と都内公立小との交流

2022 年度の非同期交流に引き続き、2023 年度はまず初めに、東京の 6 年生が台湾の 5 年生が作成した学校紹介ビデオを視聴した後、感想や類似点、相違点について話し合い、質問をまとめて台湾に送った（図１）。そしてその返事をもらい、2023 年 6 月のオンライン交流会本番の日を迎えた。東京の小学校は、外国語授業での成果物の発表を兼ねた“Welcome to Japan!”と“Japanese seasons”について iPad も使いながら、台湾は、学校生活や授業科目紹介、台湾で知られている日本の事柄（アニメなど）についてのクイズを含んだスライド発表をおこなった（図２）。このように、2022 年度終わりから数カ月かけて非同期から同期交流まで、それぞれの外国語の専科教員が自らの授業に、このプロジェクトを組み込みながら進めた取り組みとなった。

図１ ビデオ視聴

図２ オンライン交流会

3-2　参加校の教師協働による現地訪問授業

Agrupamento de Escolas de Santa Comba Dão 校（ポルトガル：2023 年 9 月 28~29 日）の英語教員である Manuela Mendes Silva 先生とは、2017 年に Holiday Card Exchange Project で交流校の 1 つとなったことが最初に知り合ったきっかけで、ここでのお互いのやり取りで意気投合し、2019 年に TOPA が立ち上がった当初から小・中学生とも参加してくれ、2020 年、2021 年の TGE でのオンライン交流会でも発表してくれた。山間部の小さな村の学校であるため、少しでも自分の生徒たちに広い世界を経験させたいと熱心にプロジェクトに取り組み、常に高いレベルの成果物を共有して下さる尊敬に値する先生だった。2022 年の北京の際は冬季スポーツという理由で不参加だったが、個人的なコンタクトは続いていたため、筆者の海外フィールドワーク中の今回の学校訪問もご自身の退職前の最後の国際交流として快諾、他に小中 4 人の先生方に声をかけ、他トピックも含めた計 6 時間の訪問授業全体を取りまとめて下さった。

もう１つの訪問校の Kavya School（ネパール：2024 年 2 月 21~22 日）の創立者で校長の Nawaraj Baskota 先生とは、前述の 2018 年の米国でのアイアーン国際会議の際に、まさに TOPA Project 発足のためのポスター発表でお会いし、その際筆者の支援校の児童たちが作った東京 2020 を紹介するカードについて感想を述べるビデオメッセージのお願いにも快く応じて下さった。Nawaraj 先生が先進的に国際化、ICT 教育を強く進める私立校であることからも、その後やはり小・中学生ともに最初からこのプロジェクトに参加してくれ、TGE 2020,2021,2022 と全てにおいて発表もおこなってくれた。今回の訪問では自らはもとより、今後 TOPA の直接担当となる若手の先生を付けて下さり、また美術の先生の協力も得ての授業となった。この 2 校での訪問授業のうち、TOPA 関連活動は以下のとおりである。

○タイトル：“TOPA Project ~ Peace Orizuru & Olympic Truce”（図３,４,５,６,７）

図３ ポルトガルでの５年生授業

図４ ピース折り鶴と Manuela 先生

図５　ネパールでの授業と Nawaraj 先生

図６　コラージュ作成　図７　完成コラージュ

〇授業の流れ：TOPA の説明と今までの先輩たちの活動、折り鶴の意味、広島で被爆した貞子さんの祈りの折り鶴の物語、東京 2020「ピース折り鶴プロジェクト」と東京の児童たちのコラージュ作品を紹介した後、日本の文化体験を兼ねて折り鶴ワークショップをおこなった。そして Olympic Truce について説明後、グループごとにピースメッセージを話し合い、作った折り鶴を使って「ピース折り鶴＆オリンピック休戦コラージュ」を作成、成果物として共有した。

3-3　エラスムス・プラス・ミーティング参加

以前、別のプロジェクト（坂本・滝沢, 2015）のために、坂本ひとみ先生と一緒に訪問させて頂いたトルコのTülay Önder先生の計らいで、彼女が参加している２つのプロジェクトミーティングにゲストティーチャーとして参加、ワークショップをさせて頂く機会を得た（ポルトガル: 2023年10月2日～7日 坂本ひとみ先生と, ポーランド: 2023年10月23日~27日 単独で）。エラスムス・プラスとは、EU が現在実施しているすべての教育、研修、若者、スポーツのための企画を意味し、加盟国とメンバー国がプロジェクト申請書を提出し、それが認められると資金を得ることができる。小中生が対象のプロジェクトでは、２年間で1つのプロジェクトの参加国すべてを教師と生徒たちが訪問し合い1週間ほど滞在しながら、国境を超えてともに学び合うプログラムである（坂本, 2024）。今回の参加では筆者はTOPAの活動ではなく、各プロジェクトのテーマ、“Myths past and present: from paper to computer ： My Tremendous Heritage”（ポルトガル・フランス・トルコ・北マケドニア 図8）と “Let’s Plant Ecology into Our Society!” （ポーランド・トルコ・ギリシャ・ポルトガル）に合わせて、日本文化紹介を兼ねた“Languages in Portugal and Japan”と“Mottainai & the 5Rs”というワークショップ形式の授業をさせて頂いた 。筆者の授業案は前述のように、CLILの4Cs観点で構成されており、質問紙と自己授業評価についても同様であった。

図8 エラスムス・プラスの教師たちと

４．成果と課題

〇成果

・日本の小学校外国語授業で専科教員がプロジェクト活動を教科書にうまく連動させ、海外とのオンライン交流会で児童がその成果を発表するところまでの機会を提供することができた。

・海外参加校を訪問、現地の教師たちと協働し、現在重きを置いている「ピース折り鶴＆オリンピック休戦」をテーマにした CLIL 授業を実践できた。親交をより深められたと共に 6 月の TGE 2024 の準備としても良い経験となった。

・エラスムス・プラスに参加し、EU の教育政策のスケールの大きさと教師同士の協働の素晴らしさを目の当たりにした。民主主義の中で対話による信頼の力を子どもたちと共に教師同士もその協働において培っていくことが平和にも繋がっていく、という実感を持つに至った。

〇課題と今後への示唆

・TGE 2024 に向け、いよいよ活動を本格的に充実させていけるよう役目を果たしていく。

・今回知り合ったエラスムス・プラスの教師たちともTOPAで協働し、彼らからより学ぶと共に、オンラインではあるが日本を含む欧州以外の国々との交流も経験してもらえるよう働きかけていきたい。

５．参考文献

坂本ひとみ・滝沢麻由美(2015) 「福島とトルコの子どもを結ぶ英語環境教育プロジェクト」東洋学園大学紀要 24 号 pp.163-180.

坂本ひとみ(2024) 「エラスムス・プラスおよびアイアーン参加報告」メディア情報リテラシー研究第 5 巻第 1 号 pp. 19-28 法政大学図書館司書過程

町田潤子・滝沢麻由美(2018) 「国際理解教育としてのオリンピック・パラリンピックをテーマにした小学校英語教育教材の開発研究報告書」日本児童教育振興財団

Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace

～今、この時代に広島・長崎が語り継ぐことは何か～

Project Facilitator　高木洋子

私たちの地球上で繰り返される内戦・紛争・戦争は、残念ながら止まることを知りません。そして今、地球を破滅へ導く核兵器の脅威を伝えられるのは、広島・長崎である。

核兵器　戦争　平和　ZOOM 会議

1. はじめに

2006 年に iEARN プロジェクトとして誕生した本プロジェクトは 16 年目を迎えた。2023 年度は多くの国・多くの学校からの参加があったわけではないが、取り組んだクラスの内容の深さや豊かさがあった。参加国は、プエルトリコ・パラグアイ・アルゼンチン・コロンビア・台湾・ロシア・日本の 7 か国であった。

２．目的と方法

2-1 目的

広島・長崎を知り、現状を知り、世界平和への歩みをフォーラムやオンライン会議で共有する本プロジェクトを通して、生徒同士が学び合い、地球市民としてコミュニケーションを深め、互いに平和への道を歩むことを目的とする。

2-2 方法

1) 当プロジェクトに登録する。
2) Teacher's Guide を読み、”Machinto books for your class”で「まちんと」「My Hiroshima」の 2 冊の絵本を申し込む。
3) Machinto Student Works Part 1～3
   Part 1: 広島・長崎で知っていること
   Part 2: 2 冊の本, 他を読み、コメントする
   Part 3: 平和への個々の作品を共有する
4) 各種 Machinto プログラムの提案・参加
5) Zoom で Machinto 会議を行う。

３．活動内容・研究内容

3-1　**Machinto Student Work III**

高森高校（山口県）赤松先生の指導で 11 件の Slide Show ”Creating Peace”が投稿された。お互いに否みあう者同士がどのように和合し合うことが可能か等、素晴らしい作品集である。スライドには個々に作者による音声が吹き込まれ、iEARN のサイトにはアップされているので参照されたい。

表 1　高森高校生の作成した作品名

作品名	作成者
EGG　WAR	Kana
Power of Small and Cute Things	Haruna
Planetary　Connections	Riko
”Takenokonoyama”And ”Kinokonosato” War	A Mio
NewMt.Kachi　Kachi	Yura
Girls'　Activities	Satoko
Another Story of Little Red Riding Hood	Taku
A Dove in a Town	Mizuki
A New Story of Fight of the Monkey and the Crab	Minato
The Miracle of Great Girls	Manami
Bakery with Mark	Nonoka

以下　上記の音声付きのスライドを掲載する。

図 1　音声付きスライド

3-2 Machinto Latina in Spanish

パラグアイやプエルトリコからも書き込みがあるが、すべてスペイン語で書かれている。主に Padlet に書かれたものを転載している。

3-3 100 years later (2123) What would the world be like?

２つの Padlet の掲示板を使い、100 年後の世界を想像してみようという問いかけに高森高校・啓明学園高校・東洋学園大学から多くの投稿があった。

3-4　Yoko's Story
"Connections Past and Present: The Experience of a Japanese Refugee Repatriated from Manchuria"

筆者自身が生まれた旧満州での銃を持ったロシア兵による略奪恐怖から書き始めた体験談である。この体験談を読んだ啓明学院関根先生からのメッセージを得ている。また東洋学園大学、坂本先生の企画で 1 月 8 日、11 日の 2 回にわたり学生たちとの zoom を行い、学生からの質問に答えた。

3-5　Machinto Talks by Zoom

①　2023 年 9 月 14 日

アルゼンチンの Martha 先生と生徒との zoom 会議を行い、質問に答えた。

図２　アルゼンチンとの zoom 会議

②　2023 年 9 月 25 日

コロンビアとプエルトリコの生徒との zoom 会議の実施。この時にはオブザーバーとして iEARN Latina と インドからの参加もあった。

3-6　Machinto Talk India and Japan

India 側の Anisha 先生からの依頼により設定をしたが、時間の関係でパートナーとなった高森高校の生徒たちの自己紹介のみに留まり残念な結果となった。

3-7　"What is HEIWA?" - Workshop

青山学院大学の皆さんによる報告の予定

3- 8　Faith Hope Love II ～One Flower～

昨年の 5 年生との zoom に続き、St.Stephen's Elementary School は,今回 4-6 年生と YOKO との ZOOM 会議が松村先生によって開催された。内容は YOKO の話あり、生徒たちの質問ありで、最後には”みんなで平和を”が歌われた。後日、生徒の皆さんから手紙が届き、感動のセッションとなった。

図３　送った絵本を見る小学生

図４　参加者からもらった感想文の束

3- 9 ロシアの生徒たちとの zoom 会議

テーマ：What makes you happy？

ロシアの Olga 先生の依頼により、5 月 13 日 ZOO 会議を開催し、個々の生徒たちへ参加証明書を作り送った。

図５　プロジェクト参加証明書

3-10 **Pray for Peace Together with Ukrainian Refugees**

Ukraine teacher Ms.Luiboc shared their holidays with her students, and the short video entitled "the Defender's Day", at the last forum "Machinto Bird to/from Ukraine

図６　休日を示すウクライナの小学生

．４．成果と課題

〇成果

生徒の皆さんの平和への作品は、内容が豊かで深みがある。特に高森高校の”Creating Peace”Slide Show は見ごたえがあった。

〇課題

昨年と同様に海外参加校が少なく、生徒同士のコミュニケーションが期待できず今後の課題である。

GOMI on EARTH

～ゴミの長い旅～

Project Facilitator　高木洋子

私はゴミであるという設定で行うプロジェクト。近年の地球温暖化、プラステック問題、またSDG14 に関わるゴミに対して、iEARN を通して子ども達・生徒達が身近なゴミへの意識に目覚め、未来の地球を護るためにゴミ活動へと展開する。

GOMI 探偵家　　世界の GOMI の現実　　GOMI 活動家

1. はじめに

2017 年に発足した本プロジェクトは、7 年目に入った。世界のゴミの現実が人々の日常生活や健康に影響を与える現実を踏まえ、GOMI on EARTH 活動を続ける。

２．目的と方法

2-1 目的

まずゴミへの意識を育てる。自分の手から離れた身近なゴミから始まり、家庭・学校・地域・日本の、そして地球規模のゴミへと興味・関心を広げ深める。参加国間のゴミ事情を共有し、ゴミ活動を展開する

2-2 方法

Schoology を使った iEARN Collabolation Center “GOMI on EARTH”への参加登録をし、次の各 Folder に沿って進める：

１）学校紹介・参加者自己紹介
２）Part １:あなたは GOMI 探偵家
３）Part ２:世界の GOMI 現実を知ろう
４）Part ３:あなたは GOMI 活動家
５）Series MOTTAINAI
６）Reflections

３．活動内容・研究内容

3-1　学校紹介・参加者自己紹介

Bill 先生による Dawson school（USA)紹介と 8 名の生徒たちの自己紹介から始まり、続いて仙台上杉山中学校,若生先生の生徒たちが SlideShow で魅力的な各自己紹介を投稿。また上杉山中の生徒たちが、Bill の生徒自己紹介への返事や質問を載せた。更に高森高校（山口県）赤松先生による学校紹介があった。

3-2　Part I: You are GOMI Detectives

Bill 先生の 5 人の生徒がゴミ探検家として”Ocean　Micro plastics”に関するスライドを投稿、更に 7 名の生徒が”Single use of Plastics”に関するスライドを投稿し、上杉山中学生たちが個々にコメントを載せて対応した。

3-3　Part II: World GOMI reality

世界のゴミの現状を映像等で紹介。

3-4　Part III: You are GOMI Activists

ゴミ活動家としてゴミ問題にどう対応するか、上杉山中学校では、主として学校や家庭のプラステックに関する調査結果を台湾の交流校へ。

図１　上杉山中学校のスライド

更に台湾の Taoyuan Bade JHS と環境について 5 回に亘るオンライン会議が開かれた。高森高校からは 11 編の”Reusing things by repairing” Slideshow が載せられた。

図２　高森高校のスライド

3-5　Series MOTTAINAI

本プロジェクトを主催をする青山学院大学による報告有り。（別レポート参照）

４．成果と課題

成果としては、昨年に続いて DausonSchool（US）と仙台上杉山中学校の GOMI を通じた協働学習が続いていること、特に Micro Plastics を中心に専門的な分野に及んでいることである。

課題としては、ゴミは興味深い国際協働学習対象であるが、参加国・参加クラスが少なく、参加を増やす取り組みが必要である。

中学校実践編

中学生の世界を広げる COIL 型教育の展望

～GOMI　on ERATH のプロジェクトから～

仙台市立上杉山中学校　若生 深雪

本稿の目的は、中学生を対象とした COIL 型教育の実践報告，および実践によって明らかになった成果と課題を述べ、COIL 型教育の可能性を論じることである。プロジェクトの目的は、日本と台湾の中学生が、マイクロプラスティックに関わる環境問題をテーマにした協働学習を行い、ユネスコが提唱した「地球市民教育：Global Citizenship Education」における教育理論を基に、持続可能な社会を目指し、国を跨いだ若者同士の連帯感を育成することである。その学びの様相を捉えるため、日本の生徒へ振り返りのレポートとインタビューを実施した。それらを分析した結果、日本の生徒は、台湾の生徒に対する関心から、分析的な思考と観察力を使って相手を知ろうとし、そして、地球市民として台湾の生徒との連帯感を高めたことが明らかになった。

国際協働オンライン学習　COIL 型教育　AIE　中学校

1. 研究の背景

高等教育機関では、急速なグローバル化に対応するための資質・能力を身に付けさせるために、国際共修、留学、COIL など様々な形態で、海外の学生との協働的な学びを実施している。しかしながら、そのような教育手法は、大学生になる前の段階から導入することで、一層教育的効果が期待できるという考えがある。

本稿で扱う COIL 型教育とは、Collaborative Online International Learning の略称であり、日本語に翻訳すると、「国際協働オンライン学習」である。主に連携する大学間で行われ、ICT を活用し協働的な学習を実現させる革新的な教育手法である。現在中学校では、生徒一人一台の端末が貸与され、COIL 型教育に必要なハード面での教育的環境が整備された。ところが、文部科学省が毎年実施する英語教育実施状況調査の 2022 年度版によると、「ICT を活用して、児童生徒が遠隔地の児童生徒等と英語で話をして交流する活動」を実施した学校の割合は 10.1％であり、ICT の活用率が低い。交流の実施校であっても、ある程度の期間を費やし、複数回の交流を通して、深い学びにつながるような授業を展開している中学校は、少ないのではないだろうか。このような背景から、中学生への COIL 型教育を試みることにした。

２．研究課題と授業計画

2-1 研究課題

この実践で、中学生が一番興味と関心を示すのは、交流相手が同年代で、かつ異なる言語・文化を持つということであろう。そこで、学びの過程を観察する視点を、「学習テーマ」に加えて「交流相手」の２つに設定した。異なる文化を持つ学習者同士が学ぶ文脈で、「交流相手」と「学習テーマ」に対する心理的、認知的側面がどのような様相を呈するのかを捉えたい。そのため、以下のような研究課題を設定した。

> 本実践に参加する日本の中学生は、以下の 2 つの視点に関して、どのような反応を示すのだろうか。
> (1) 異文化を持つ他者に対する印象や態度
> (2) 環境問題への視点や態度

2-2 方法

1）実施計画案

交流に参加したのは、筆者の勤務校に通う中学 2 年生 10 名と、台湾の桃山市立八徳国民中学 1、2 年生 21 名であった。交流は、2023 年 10 月から 12 月にわたる約 3 か月間、日本側の一部の活動を除いて、全て課外活動として放課後に実施した（詳細については、表 1 を参照）。メインとなるオンライン交流は、合計 6 回、日本時間の 17 時から 17 時 45 分まで、約 45 分間実施した。

プロジェクトのテーマは、マイクロプラスティックの環境問題で、両校の教員が協働で立案した学習活動を、それぞれの国で実施した。活動は、一単元に相当する内容であった。学習はハイブリット型で実施し、遠隔地同期型オンラインとして google meet を、非同期型交流として Padlet を活用した。また、ペアとなった台湾の生徒とは、お互いにプレゼントとカードを郵送し合って交換した。

両国で実施した、具体的な活動を時系列に列挙すると、1 週間の家庭ゴミ調査、マイクロプラスティックの環境問題を扱ったドキュメンタ

リー映画の鑑賞、さらに、その映画を制作した監督とオンラインでの座談会（日本のみ実施）、海岸でのマイクロプラスティック採集活動であった（表 1 を参照）。これらの活動の成果をスライドにまとめて、google meet で台湾の生徒と報告し合った。また、随時情報を交換するため、Padlet を活用した。Padlet には、意見や質問、自己紹介、伝えたい情報のリンクの貼付などを投稿した。プロジェクトの最後には、iEARN のプラットフォームに成果物を投稿した。そこでは、昨年度から交流のあった、アメリカ、コロラド州の Dawson School の小学生とやりとりすることができた。

2）学習の評価方法について

日本側の一部の活動は、この実践に参加した 10 名を含む、中学 2 年生全員を対象にした英語の授業で実施し評価を行った。本実践は、課外での交流活動であったため、学習評価は実施しなかった。

表 1　活動の全体計画

日時 / 活動母体 / 活動 / 学習内容 / 学習目標 / ユネスコの学習成果との関連（表 2 を参照）
10 月上旬 / 授業 / 映画視聴 /「マイクロプラスティックストーリー ーぼくらの 2030 年ー」/ 持続可能な社会を考える際の鍵となる、「システム思考」「批判的思考」を取り入れ、マイクロプラスティックの包括的な理解につなげる。/ ①②
10 月中旬 / 授業 / 実地調査 / 1 週間の家庭ゴミの量と種類の調査 / 生活に密着した調査から、テーマを自分事として捉えさせる。/ ④
10/15 / 課外 / 第 1 回オンライン / 日本人教員と台湾人生徒との交流 / 日本側の情報を提供し、国際間協働学習への心構えを持たせる。/ ①
10/25 / 課外 / 第 1 回オンライン / 台湾人教員と日本人生徒との交流 / 台湾側の情報を提供し、国際間協働学習への心構えを持たせる。/ ①
11/13 / 課外 / 第 2 回オンライン / 自己紹介（スライド発表）/ 国を跨いだ学習者に親近感を与える。/ ③ ④
11/15 / 授業 / オンライン / 映画監督との座談会 / 映画監督との意見交換から、テーマに関して新たな視点から深く学ばせる。/ ②
11/16 / 課外 / 第 3 回オンライン / 映画の特定場面に絞り作成したスライドを用いて自分の意見を発表（スライド発表）/ 様々な視点での意見を聞き、多様な考えがあることに気付かせる。/ ④
11/19 / 課外 / 実地調査 / 海岸マイクロプラスティック採集（台湾 10/28）/ 実際に行動し、自分の目で確かめて得た情報がなぜ重要であるかを考えさせる。/ ②
11/29 / 課外 / 第 4 回オンライン / 海岸調査の報告（スライド発表）/ 異なる社会集団が、共感と連帯を育んでいくことが可能であることを実感させる。/ ⑥
12/13 / 課外 / 第 5 回オンライン / 環境問題の解決に向けての最終報告（スライド発表）/ 今後の自発的な「持続可能な社会」の取組みにつなげる。/ ⑤
12/15 / 課外 / 第 6 回オンライン / プロジェクトの解散式（踊りや歌の発表）/ プロジェクトの成果を確認し、自己肯定感に結び付ける。/ ⑥

3）学習目標

学習目標は、ユネスコの「地球市民教育: Global Citizenship Education」の概念から、「持続可能な社会を目指し、自分とは異なる文化背景や考えを持つ人々を尊重して、多様な人々や社会集団に対する共感と連帯を育むこと」である。そのため、ユネスコが 2015 年に発行した、『地球市民教育に関するトピックと学習目標 ：*Global Citizenship Education Topic and Learning*』より、「地球市民教育の主要な学習成果：Key Learning Outcomes」の 6 項目（UNESCO,2015,p.29）が重要であると考えた（表 2 を参照）。そこで、毎回の活動の目標は、ユネスコの掲げるに教育目標を達成させるため、表 2「地球市民教育の主要な学習成果」に記載された①から⑥の学習成果から選択した。また、毎学習内容が、どの学習成果に結びつくのかを、表 1 の「ユネスコの学習成果との関連」に示した。

表 2　地球市民教育の主要な学習成果

「認知的：Cognitive」
① 学習者は、地域、国内、および世界の問題や異なる国々や人々の相互依存性や相互関連性に関する知識と理解を獲得する。 ② 学習者は、批判的思考や分析のためのスキルを高める。
「社会情緒的：Socio-Emotional」
③ 学習者は、人権に基づく共通の人間性への帰属感、価値観や責任を共有することを経験する。 ④ 学習者は、共感、連帯感、異質性や多様性を尊重する態度を高める。
「行動的：Behavioral」
⑤ 学習者は、より平和で持続可能な世界のために、地域、国内、世界レベルで効果的かつ責任ある行動を取る。

⑥ 学習者は、必要な行動を取るための動機付けと意欲を高める。

出典『Global Citizenship Education Topic and Learning』（UNESCO,2015,p.29）
筆者による日本語訳

３．調査の手続き

3-1　質的データの収集法

研究デザインは、Strauss & Corbin （1998）版を参考にし、「Grounded Theory Approach：（以降，GTA と呼ぶ）」による質的帰納的研究とした。データは、生徒の振り返りの記述と半構造化インタビューの 2 つの質的データを使用した。生徒の振り返りは、オンライン交流直後に google form で回収し、合計 6 回実施した。インタビューは、プロジェクトの終了後、生徒 10 名に対して、一人約 1 時間実施した。調査に協力した 10 名の中学 2 年生は、COIL 型教育を初めて経験し、ほとんどが海外の同年代と接触した経験はなく、海外への渡航経験の無い生徒が半数であった。なお、録音した音声は、文字音声変換ツール NOTTA を使用して文字起こしをしてテキスト化した。

3-2　質的データの調査項目

生徒が実施した振り返りは、欧州評議会言語政策部門が開発した、「自己省察型ツール：Autobiography of Intercultural Encounters（以降，AIE と呼ぶ）」の 2022 年度版を参考にしたものであった（Barrett & Byram, 2022,p.55)。AIE は、学習者が異文化との体験について、様々な視点からの問いかけに答えていくプロセスを通して、異文化の他者への気付きを深化させ、異文化間能力を高めるように考案されたツールである。AIE は、実施される文脈に合わせて、問いかける内容を変更し精度を高めることが推奨されている。今回は、オンライン学習での異文化交流に合わせて内容を一部修正した。以下が、今回使用した AIE の 10 項目の問いである。

1. 台湾の友達について、印象に残っていることや、覚えていることを全て書き出しましょう。
2. 台湾の友達に分かってもらうために何か工夫や努力をしましたか？工夫や努力をした人は、それを台湾の友達は理解してくれましたか？
3. あなたは、台湾の友達とどのような気持ちで会っていましたか？
4. 反対に台湾の友達は、どのような気持ちであなたと会っていたと思いますか？なぜそう思いますか？
5. 台湾の友達と似ていること、異なることがありましたか？あったら教えてください。
6. 文化の異なる台湾の生徒との出会いで、感じたり発見したりしたことがあれば教えてください。
7. 今日の交流のテーマから、考えたり発見したりしことがあれば教えてください。
8. 今日のテーマの学習に対する台湾の友達の考え方について、何か気づいたことはありますか？あれば教えてください。
9. この交流をしたことによって、何かをしようと思ったり、何かを決意したりしましたか？あった人はその内容を教えてください。
10. 次の交流で、台湾の友達に聞きたいことや、自分について話したいことがあれば教えてください。

インタビューの質問項目は、「台湾の生徒に対してどんな印象がありましたか」、「環境問題に対しての意識は変わりましたか」、「交流から何を学びましたか」などであった。インタビュー中は適宜「なぜ、そのように思いましたか」、「その時、どのように感じましたか」、「反対に相手はどう思っていたと想像しますか」など補助となる質問をしながら、回答を引き出していった。

3-3　分析方法

分析の大きな流れは、データの信頼性を確保するために、AIE を GTA の手法で分析をし、そこから得られた結果に対して、さらにインタビュー内容で補完する二段構えとした。データは、オンライン交流を欠席し AIE を提出しなかった生徒の AIE を除き、全ての記述を分析対象とした。質的データ分析ツールは、MAX-QDA22 を使用した。

GTA で提唱されている分析手順は、オープン・コード化でデータを概念化、軸足コード化、そして選択コード化による 3 つのコーディング手続きである。本実践で AIE に記述された文章データの総数は 485 個であった。それらを意味のあるまとまりに切片化したところ 533 個となった。生成された概念同士の関連性を検討したところ、抽出した概念は、4 つの学習の過程を生成した。その下位概念は、「プロジェクトからの成果」については、1 つのカテゴリーと 2 つのサブカテゴリーが生成、「プロジェクトの学習過程（認知的・行動的側面）」については、3 つのカテゴリーと 10 のサブカテゴリーが生成、「プロジェクトの学習過程（知識の獲得）」については、1 つのカテゴリーと 2 つのサブカテゴリーが生成、そして、「プロジェクトの学習過程（態度・心理的側面）」については、3 つのカテゴリーと 6 つのサブカテゴリーが生成された（表 3 を参照）。

図１　マイクロプラスティック採取の様子

なお、表 3 には、紙面の都合上、各サブカテゴリーから一例を示し、総データの数を記載した一覧を掲載した。また、図 2 には、選択コード化によって、ストーリーラインを明確にした上で中核カテゴリーを選び、他のカテゴリーと関連付け構造化したモデル図を掲載した。この図も、学びの様相が分かる程度に簡略化した。

表 3　カテゴリーとサブカテゴリーとその例

【カテゴリー】	［サブカテゴリー］	＜例(AIE からの記述)＞	数
プロジェクトからの成果			
Ⅰ.連帯感	1.文化の視点	言語が違うが思っていることは皆同じ	5
	2.環境問題の視点	道のりや考え方は違うけれど一緒にそこへ向かって進んでいる	5
プロジェクトの学習過程（認知的・行動的側面）			
Ⅱ.分析（比較）	1.異文化との接触	相手の立場などを想像して対話する事が大切	17
	2.スライド	台湾の人の自分たちが考えつかないアイディア	12
	3.環境問題	台湾の方が対策とか進んでいた	16
	4.文化	意外と漫画とかの好みは同じ	35
Ⅲ.交流中の工夫と努力	1.努力と工夫	お友達になる勢いで自己紹介は聞きました	19
	2.発音／声量／速さ	なるべく相手に分かるようにゆっくり話した	21
	3.スライド	中国語も少し取り入れるなどの工夫をしました	25
Ⅳ.英語力への認知	1.ポジティブ	台湾の人にしっかり英語が伝わったかなと思った	12
	2.不安	発音が少し違って聞き取りづらい部分があった	5
	3.台湾生徒の英語	英語をスラスラ喋ってすごいと思った	5
プロジェクトの学習過程（知識の獲得）			
Ⅴ.情報の取得	1.環境問題の知識	台湾も日本も海の状況は似ているなと思った	25
	2.文化の知識獲得	日本の文化やアニメは人気がある	10
プロジェクトの学習過程（態度・心理的側面）			
Ⅵ.環境問題	1.感想や意志	使い捨てのカップを使う店に行く頻度を減らそう	29
	2.台湾生徒の姿勢	関心があり自分の意見をしっかり持っている	13
Ⅶ.台湾生徒に関する事	1.相手の考えを推測	今回が初対面だったから相手も緊張している	54
	2.台湾生徒への賞賛	人前に立って堂々と話したり歌っていた	24
	3.生活文化への関心	向こうの学校の校則はどんな感じか	32
Ⅷ.気持ち	1.交流の感想	自分の趣味についてもっと話したい	149
	2.文化への関心	台湾の言葉について知りたい	20

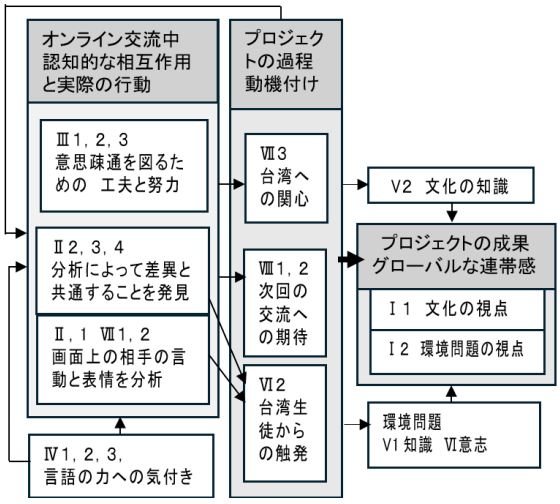


図 2　プロジェクトの学習過程の関連図

４．成果と課題

4-1　成果

分析の結果、日本の生徒が台湾の生徒と交流して生じた変化の様相を捉えることができた。研究課題(1)「異なる文化を持つ他者に対する印象や態度」については、相手の表情や言動をよく観察して、どのような人物であるのか、自分たちに好意的であるかどうかなどを判断していた。ある生徒のインタビューでは、「日本よりなんかもっとフレンドリーな感じがして、結構明るい印象がすごいありました」と台湾の生徒に対して好印象を示し、その結果、台湾の生徒と仲良くなりたいとの動機付けが高まっていた。実際に、その生徒は、交流を深めるために、オンラインの特殊性を考慮してコミュニケーションの方法を工夫していた。ある生徒が、「違う国の人だからどう表現したらいいのかとか、そういう相手に向かっての態度とか、気持ちとかも変わったなって思いました」と自分の成長を語っていた。ある生徒は、両国の学校生活の差異と共通事項を、分析的な思考を使って考えていた。その分析的な思考は、互いを理解し、距離を縮めるために重要な役割を果たしていた。

研究課題(2)「環境問題への視点や態度」については、長期的・協働的な視点から自分事として捉えさせる成果があった。ある生徒のインタビューでは、「自分のためっていうよりも自分たちの後の世代、子供とか、なんかそっちの方が少しでも良くなれば」、「国と国が手と手を取り合って何か問題解決するようなときが来たらいいなと思って」と語っていた。

4-2　課題

COIL 型教育は、教室にいながら海外の生徒とつながることができる反面、その限界もある。参加者は、モニターから捉えることができる限定された視覚・聴覚の情報によって交流を展開する。台湾の生徒の事後アンケートから、台湾の全生徒は、日本の生徒を「とても礼儀正しい」という印象を持ったことが分かった。それは、「お礼など挨拶をしっかり行って台湾の生徒に好意を伝えよう」という日本側の意図が誇張されて認識されたためであると思われる。交流は、切り取った場面の中でのやりとりである。今回のように、そこでの唯一の印象が、その国や人に対してのステレオタイプを助長させることもある。オンラインの特性を加味しながら、交流を進めていく必要があるだろう。

4-3　限界

中学生に対する COIL 型教育の可能性を確かめるために、少人数での課外活動を実施した。今後は、正課の教育課程に広げることを念頭にし、JEARN の活動がどのように貢献しうるのかその方法を考えていきたい。

参考文献

UNESCO. (2015). *Global citizenship education topics and learning objectives.* UNESCO. https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000232993

Barrett.M,Byram.M.(2022). *Autobiography of Intercultural Enclunters 2nd edition2022.* Council of Europe

Strauss, A. & Corbin, J.（1998）. 操華子・森岡崇訳（2004）.『 質的 研究の基礎 第２版：グラウンデッド・セオリー開発の技法 と手順』 東京：医学書院.

高等学校実践編

“Girl Rising Project”の実践

― 「女性の人権」と「質の高い教育」を目指して―

啓明学園中学校高等学校　関根　真理

持続可能な開発目標（SDGs）には、「目標４質の高い教育」と「目標５ジェンダー平等」が含まれている。世界の全ての女子が質の高い教育を受けることが出来れば、女子の周りに良い変化が起こり、社会を変えていく原動力に繋がっていくことをこのプロジェクトを通して学ぶことが可能である。

質の高い教育　　女性の人権　　国際協同学習　　課題発見　　課題解決

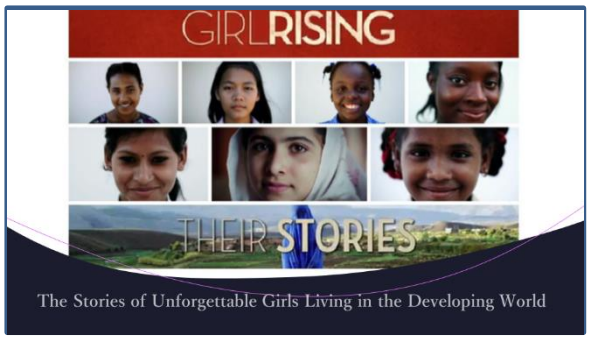
1. はじめに

Girl Rising プロジェクトを 2013 年に開始した理由は、筆者がマララ・ユスフザイさんの勇気ある行動に共感し、新しいプロジェクトとして女子教育の大切さについて協働学習をしたいと iEARN の Teachers Forum に投稿したのが始まりである。

２．目的と方法

Girl Rising プロジェクトは、開発途上国で女子がどのような境遇にあり、その中で教育を受けた女子がどのように変化し、周りに影響を与えることが出来るかを学ぶ。さらに、他国の生徒と協働学習することにより、自国や他国に存在するジェンダー問題を発見し、課題を解決するために立ち上がり、アクションを起こすことを目的としている。

参加するには、まず Youtube 動画で公開されている Girl Rising の 9 ヶ国（カンボジア、ハイチ、ネパール、エジプト、エチオピア、インド、ペルー、シエラレオネ、アフガニスタン）および Brave Girl（ケニア難民キャンプ）の少女たちの教材映像を視聴することが可能である。どの国の映像をどのぐらいの期間費やして学習するかは、担当教員の判断による。国によって児童労働・児童婚・貧困難民など、テーマと内容と問題提起はそれぞれ異なるので、教員は事前にストーリーを視聴し、扱う生徒の年齢や学校の地域性を考慮してテーマを選択する必要がある。授業では、生徒達が動画を視聴し、フォルダーの中に挙げられている質問に答えることから始める。



勤務校では、対象国の課題や情勢について調べ、グループごとに話し合う時間を設けている。さらに、問題解決する為にどうしたら良いかをまず自分たちで模索する。その後、自分の意見や感想をオンライン上のフォーラム（Schoology）に投稿する。

フォーラムでは、同じ教材を学んだ他国の生徒とお互いに気づいたこと、学んだことを共有し、協働学習をすることによって、理解を深めていくことが出来る。生徒同士はフォーラムへの投稿だけでなく、写真やビデオレターの交換などが可能である。互いの時間の調整が出来れば Zoom などのオンライン会議を実施することも可能である。

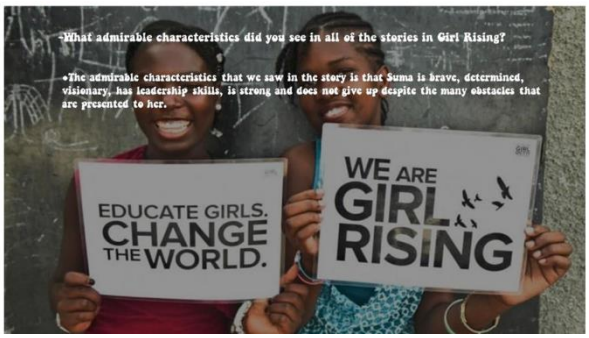
３．活動内容

活動内容として、勤務校の高校 3 年生の選択授業「国際理解」の授業実践を紹介する。2023 年度は、26 名の生徒がプロジェクトに参加した。この年度は、海外在住歴のある生徒に外国籍の生徒を加えると半数を越える為、英語と日本語のバイリンガルで授業を進めた。従って、他国の生徒とのコミュニケーションはスムーズに行われた。

《アルゼンチンの高校生の紹介スライド》

◆アルゼンチンの高校生との協働学習

1 学期は、アルゼンチンの女子高校生と協働学習をした。Girl Rising の動画の中からカンボジアの Sokha とネパールの Suma を通して、女性であるがために現在でも人権を侵害されるような文化や風習があることを知り、この問題を解決するために自国の人々や周りの国々がどのように接していくべきか意見を交換し討議した。さらに、パワーポイントを使用してお互いに学んだことを一つのスライドにまとめることが出来た。



《協働学習で作成したスライド》

2 学期は、アルゼンチンの高校生と継続して、互いの興味関心などについても Zoom を利用して共有することができた。余暇にする好きなことなどは両国の生徒にあまり大きな違いは無かった反面、アルゼンチンの生徒は将来つきたい職種に医療やエンジニア関係を選んだことに日本の生徒は驚いていた。

◆ホットシーティング

授業には、演劇的手法の「ホット・シーティング」を用いて，動画の主人公の境遇がより理解できるようにしている。「ホット・シーティング」とは，一人または複数の生徒が「登場人物の誰か」になりきって教室の前の“ホット・シート”と呼ばれる席に座って，ほかの生徒の質問に答えるという方法だ。この手法を用いることで，ホット・シートに座った生徒は与えられた役になりきり、実際に自分に起きた出来事として質問の答えを考えることになる。また、質問をする生徒たちも，どんな質問をすることがより学びが深まるかを考え、質問を考える。さらに，ホット・シートに座った生徒の異なる視点や考えを共有することによって，クラス全体の視野がより広がっていくことになる。

これら手法を通して学んだ後，生徒はGirl Rising プロジェクトのフォーラムで自分たちが学んだことや意見を投稿する。そして，他国の生徒の投稿に対してコメントをしたり質問をしたりすることで，さらに理解を深めていくことが出来る。

◆グループポエム

学習したことをアウトプットするもう一つのツールとして「グループポエム」を近年行っている。この活動は 5，6 人が一グループとなり、英語と日本語を用いて、協力して一つの英語でポエムを創作する活動である。以下は、作品の一部である。

Suma was a slave named Kamlari
Like Cinderella doing housework.
Like a god mother giving a glass slipper,
a social worker gave her knowledge.

Suma's older brother went to school.
Cinderella's sisters wentto a party.

Cinderella's reunion with her prince marks the beginning of a bright future for Suma.

We are not ashes.
We are not objects.

We are us.

ポエムを作成した後は、それを他の人達に伝えることを目標にして、発表する準備をしている。実際にグループで発表してみてどのような気づきがあったかについて、振り返りシートに書いた感想に以下のようなものがある。

抑揚をつけながら単語の一つ一つに強調をつけながら発表するのが難しかった。逆に、棒読みで伝えてしまえば聞き取る相手はうまく理解することができないと思った。英語を苦手としている人にも思いを伝えるには、言葉だけでなく身振りや手振りを活かして発表しなければならない。

今日実際にグループで発表してみて一番良かったことは、皆が各自で出したポエムのアイデアをグループで共有し、一つの作品にまとめ上げ、それを発表できたことです。

一番最後の“We are us”が練習ではなかなか声が揃わなかったで、本番で初めて揃ってすごく嬉しかった。

生徒が創作したグループポエムは、全てiEARN の Collaboration Center に投稿して、協働学習をしている他国の教員と生徒に共有している。

◆動画作成

最後の成果プロジェクトとして３年前から動画を作成をしている。授業を通して学んだ事と自分たちに出来ることは何かを表現活動に盛り込んでいる。生徒達は、授業を通して学んだこと、そして他者に伝えたいメッセージを入れて、それぞれ約 4 分の動画を作成している。

今年度の生徒が作成した動画のテーマには、Girl Rising の少女達の住んでいる場所である「カンボジア」と「ネパール」に加え、「アメリカの格差」や「水」をテーマにしたグループもあった。テーマを選択し、分かりやすく他者に発信するための内容を決めていくのは簡単なことではなかったが、それぞれのグループが創意工夫して動画作りに専念していた。

これらの動画は、3 学期の勤務校の英語・外国語スピーチコンテストのプログラムの中でも紹介され、高校 3 年生から大切なメッセージとして中高生全員に伝えることが出来た。また、iEARN の Collaboration Center に投稿し、協働学習をしている他国の教員と生徒にも共有した。

Girl Rising プロジェクトを通して、生徒達は、国は異なっても共通して大切にしなければいけない人権と質の高い教育がいかに大切であるかを確認することが出来た。また、世界の現状を広い視点で学び、生の声を聞くことの大切さも知った。さらに、学んだことを自分の内に留めておくだけでなく、周りの人々にも知らせることの大切さにも気づくことができた。

５　成果と課題

〇成果

Girl Rising のムーブメントは、プロジェクトに参加する生徒たちが力強い地球市民になるように、共に学び合い、励まし合う仲間を生み出すきっかけとなっている。遠隔授業を通して、各国の生徒は同年齢で同じ地球に生きる者として、SDG s 「持続可能な開発目標」の「質の高い教育」と「ジェンダー平等の実現」に対して積極的に関わっていく意識を再確認することが出来た。

〇課題

プロジェクトをスムーズに行うためにはいくつかの課題がある。始めに、国際協働学習を行うプラットフォームである Schoology の使い方の学び会が他国でスムーズに行われていないことである。そのため、以前のように Schoology に参加する教員が減ってしまっている。

次に、他のプロジェクトでも同様な問題だが、相手校とのスケジュール調整が必要である。相手校の教員とはプロジェクトを開始する時期や内容について事前に打ち合わせをしておく必要がある。iEARN だけでなく、WhatsApp や Messenger などの SNS を利用して、担当教諭とコミュニケーションを密にとる必要がある。

さらに、生徒同士の学びを深めるためには、フォーラム上でお互いの感想を述べるだけでなく、自国の授業で学んだこと、他の生徒の意見に対しての批判的思考、見えてきた課題、そしてそれらの課題に対する解決策の提案などが出来る力を生徒が養うことができるように、教師は日々の授業を工夫をすることが求められる。

大学実践編
（含 Youth Project）

Youth Facilitator 実践の学び

青山学院大学　　岡田　麻唯
勝又恵理子

青山学院大学国際政治経済学部の学生が、JEARN のユースプロジェクトに参加して、3 年が経った。Machinto-Hiroshima/Nagasaki for Peace と GOMI on EARTH プロジェクトにて、ユースファシリテーターとして活動を続け、子どもたちの協働学習を促進するために、ワークショップの企画・運営を行った。ユースファシリテーターの経験は、異文化コミュニケーション能力とファシリテーション能力の向上につながっていた。

ユースプロジェクト　国際協働学習　ユースファシリテーター　グローバルリーダーシップ

1. はじめに

本学では、2020 年から、JEARN の Youth Project の活動を通して、子どもたちの国際協働学習を促進する活動を続けてきた。

2023 年度は、GOMI on EARTH と Machinto-Hiroshima/Nagasaki for Peace にて、子どもたち同士の学びを深められるようプロジェクトの企画を進めた。これらの活動を通して、ユースファシリテーターである大学生は、プロジェクトに関する知識を深めていきながら、それぞれの国の事情や背景の違いを踏まえて、子どもたちを理解しようとする姿勢が見られた。実際の交流を通して、それぞれの子どもたちに応じて、進め方や声がけの工夫が必要であることを学んでいた。

また、一方的に情報を提供するのではなく、どのようにしたら子どもたち自ら、主体的に考えてもらえるのかといった視点に立ち、その役割意識が強化されていた。これらの経験は、大学生の異文化コミュニケーション能力とファシリテーション能力の向上につながったと考える。

２．目的と方法

2-1 目的

以下の 4 点を目的とする。

①SDGs に関するテーマに関心を持ち、専門知識を深める。
②複数の学校をつなげるグローバルリーダーとなり、ファシリテーターとしての経験を積む。
③異文化コミュニケーション力を高める。
④大学生同士、チームで協力し、プロジェクトの企画・運営をするスキルを学ぶ。

2-2 方法

１）実施計画案

大学生のプロジェクトチームは、大学 4 年生が就職活動でチームから抜けたため、チームリーダーの交代と新しく大学 1 年生のメンバーが加わり、新たなチームとして進めていくことになった。活動は、月に２・３回程度、昼休みに対面で集まり、具体的な活動に向けた話し合いを行った。ワークショップや発表などの日程が決定した際には、それに向けた準備として ZOOM ミーティングを行った。

２）内容項目

Machinto-Hiroshima/Nagasaki for Peace と GOMI on EARTH Project にて、交流。

iEARN Virtual Project Exhibition にて、実施報告発表を行った。

青山学院大学の文化祭にて、ANNE FRANK パネル展を実施した。約 400 人の来場者があった。来場者の中には、アンネ・フランクについて知らない人がおり、この展示をきっかけに興味を持ってくれた人が多かった。また、ウクライナ戦争やガザ問題、台湾有事などについても話題が広がり、学生も多くのことを学んだ。さらに、子連れの親御さんからは、「こうした場があると子供に話しやすくなるので嬉しい」という声があり、戦争やホロコーストの悲惨さを後世に伝える重要な役割を果たせた展示会だった。

３．活動内容

3-1　具体的な実施内容（スケジュール）

2023 年

4 月　顔合わせ、新規メンバー募集
5 月　週一回の定期ミーティング
　　iEARN Virtual Project Exhibition にて発表
6 月　国際協働学習シンポジウム発表
　　台湾と Mottainai Workshop 実施
9 月　週一回の定期ミーティング

コロンビアとプエルトリコの小学生と交流

11 月　異文化コミュニケーション学会発表

3-2 Machinto の活動

Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace」プロジェクトに参加した大学生たちは、戦争と原爆をテーマにしたプロジェクトのファシリテーターとなり、世界中の子どもたちとともに地球規模で深刻な問題となっている戦争、そして平和について考えた。その成果報告として、2023 年 5 月には、iEARN Virtual Project Exhibition の国際大会で発表し、6 月には JEARN 主催の第 1 回目国際協働学習シンポジウムで発表を行った。また、11 月には第 37 回異文化コミュニケーション学会で発表した。

2023 年 9 月には、コロンビアとプエルトリコの小学生とオンラインで交流し、戦争・原爆についての絵本「まちんと」を通して、戦争や原爆、そして平和とは何かを考え、生徒同士の相互的なディスカッションを行った。オンラインにて交流することができ、子どもたちの協働学習の機会を提供した。

3-3 GOMI on EARTH の活動

“ Mottainai Workshop 2023 Food and Environment”と題し、ZOOM でのワークショップを考案した。

6 月には、台湾の Jhengsing Junior High School の中学生 10 名と ZOOM にてワークショップを実施した。内容は、①ユースファシリテーターの自己紹介や日本文化紹介、②参加者同士の交流を促すクイズ、③フードロスの現状、④各国フードロスレシピの紹介であった。レシピの紹介は、日本と台湾と順番に、クイズを交えながら、スライドを用いて発表を行った。お互いの食文化を知られるようなクイズの工夫で、異文化理解としてもいい機会となっていた。参加者同士がチャットを使ってコメントしあえるような雰囲気もあり、盛り上がった。発表後には、台湾の生徒が代表で感想を話してくれた。

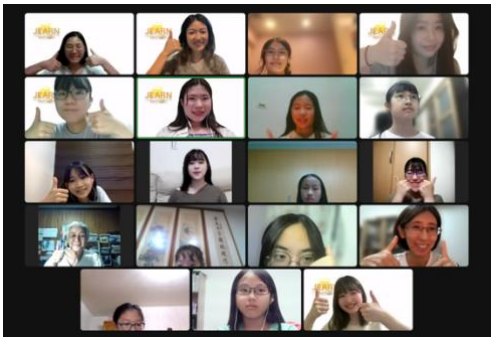


写真１　ワークショップの様子

４成果と課題

〇成果

ファシリテーターの経験が少ないメンバーが中心となり、準備から運営までを行ったが、先輩から引き継がれたものを参考に、試行錯誤しながらも、交流実現へとつなげることができた。

ワークショップの事前準備では、英語でリハーサルを行い、参加者役のメンバーに意見をもらいながら、ファシリテーターとしての振る舞いや盛り上げ方などを本番さながらに練習した。本番では堂々とした態度と笑顔で子どもたちと接している姿が見られた。台湾の子どもたちからは、好意的な評価をもらった。感想の一部を紹介する。

「I was really happy to join such a great event. It was fun and useful. The facilitators were kind. Even though sometimes we became too nervous to answer the questions, the facilitators smiled and patiently guided us step by step. When we sent messages in the chat box, the facilitators also gave us a lot of responses. That made everyone very happy!」

「Thank you for this meeting. I like the session on environmental protection because it was very close to our life, and it is presented in an attractive way. In the game, the facilitators were friendly, and the games were fun, too. The differences between Taiwan and Japan let me understand our cultures well.」

ユースファシリテーターは、子どもたちからの評価をもらうことで、ファシリテーターとなることへの自信につながっていた。

〇課題

大学生にとって、初めての交流であったことや普段から小中学生と接する機会がないことから、対象を理解した内容のワークショップを作ることが難しかった。台湾の学校とは、すでに何度か交流を持ったことがあったため、相手校の先生もとても理解が深く、こちらのリクエストに対して、子どもたちができるかどうかや英語の能力など、事前にメールで情報をやり取りすることができた。しかし、それでも、ファシリテーターの経験不足が影響し、中学生に向けた内容としては一部難しい内容があった。この点については、大学生自身がやりながら、中学生には難しい内容であったことに自ら気づきを得ていた。このような課題は、ファシリテーターの経験を積むことで、対象理解が深まり、簡単すぎず難しすぎず、学びが得られるような内容に調整・改善されていくと考える。

オンラインコミュニケーションスキルのための教材開発

平本美鈴（金沢星稜大学 4 回生）・清水和久（金沢星稜大学）

国際協働学習において、児童がオンライン上でコミュニケーションを行う際に必要とされる、オンラインコミュニケーション能力を育成するための教材を開発し、その教材の効果を児童の様子やアンケート結果から検証した。結果、教材で事前にオンラインコミュニケーションについて学んだことによって、オンライン上で交流する際の工夫が見られ、交流が活性化している様子が見られた。

オンラインコミュニケーションスキル　国際協働学習　教材開発

1. はじめに

筆者は、昨年度実施された国際協働学習に参加し、日本の児童と台湾の児童の交流の様子を見学した際に、声が小さくて発表が聞こえなかったり、カメラの画角に顔が映らずに交流が終了したりするなどの、オンライン上で交流していることが原因で、交流が活性化せずに終わってしまった場面を多く見た。これらの原因としては、日本の小学生には、オンラインコミュニケーションについて学ぶ教材を視聴してもらったが、台湾の小学生がオンラインコミュニケーションについて学ぶ教材がなかったことと、日本の小学生も工夫は考えたものの、実践できたものが少なかったことの 2 つが考えられる。このような、昨年度の結果[*1]を受け、筆者は日本の小学生向けの教材の再開発とともに、台湾の小学生向けの教材の開発を行う。

２．目的と方法

2-1 目的

児童のオンラインコミュニケーションスキルを育成するための教材を 開発し、実際に活用してその効果を検証する

2-2 方法

１） 児童に必要とされるオンラインコミュニケーションスキルを定義する

２） 日本と台湾の小学生向けに、オンラインコミュニケーションスキルに関する教材を開発する

３） 教材を使った授業の参与観察を行う。

４）交流の分析と成果・改善点を考察する。

３．研究内容

3-1　児童に必要とされるオンラインコミュニケーションスキルについて

筆者は 3 回生に、台湾との国際交流に関わっており、その時に感じた課題点と、矢野（2020）[*2]野村（2020）[*3]、片桐（2020）[*4]の、オンラインコミュニケーションスキルをまとめ、以下のように、設定する。

表１「児童に身につけさせたいオンラインコミュニケーションスキルの分類」

	視覚的要素	聴覚的要素
聞き手	・自分の感情を身振り手手ぶりや表情から伝える力	・相手の発言に対して反応する力。 ・質問を返したり、質問を求めたりするなど、話をつなげる力
話し手	・自分の感情を身振り手振りや表情から伝える力 ・相手に伝わるようにフリップ等を見せる力	・大きな声でハキハキと話す力 ・発表の内容が相手に伝わるように工夫する力

以上のスキルを身につけさせるための教材を作成する上で、教材の効果を検証するため、この教材によって目指す児童の姿を以下のように設定した。この 6 項目のスキルを身に着けるためにこの項目にあったビデオ教材を作成する。

表２　目指す児童の姿

1	大きな声でハキハキと話している。
2	相手の発言に対して反応している。
3	発表の内容が相手に伝わるように工夫している。
4	相手に伝わるようにフリップなどを見せている。
5	質問を、したり聞いたり等、話をつなげている。
6	自分の感情を身振りや表情から伝えている。

3-2　開発した教材について

開発した動画教材の項目は以下の 6 項目とし、1 から 5 の動画教材は、zoom の交流でうまくいかなかった事例を主人公が悩んで視聴者に相談している事例とした。上手くいった事例を見せるのではなく、うまくいかなかったモデルを見せる、いわゆる Bad モデルの提示である。6 については、A と B のどちらの交流が良い交流かを考える選択式モデルで作成した。

表 3　開発した動画教材の項目とリンク先

○教材の 6 項目 1 話し方について 2 聞き方について 3 内容について 4 情報の見せ方について 5 話のつなげ方について 6 気持ちの伝え方について

実施の動画教材は上記の QR コードから見ることができる。また台湾の児童にもわかるように、作成した動画には台湾の繁体語で字幕も入れたバージョンも作成した。

字幕を作成するにあたって、日本語から中国語（繁体）に変換する際に、表現の違いが出ると、教材の効果が縮小してしまうと考えた。そのため、台湾の S 小学校の校長先生に協力を仰ぎ、より児童に教材のねらいが伝わるように表現方法の修正をなん度も繰り返した。

図 1　日本版のビデオクリップ教材

図 2　中国語（繁体語）のバージョン

図 3　YouTube で表示される画面

3-3　動画教材を使った授業の参与観察の分析

1）授業での児童の様子

児童は、動画教材であることから、最初から興味をひかれている様子だった。また、教材の項目については、筆者が着目してほしいと考えていた視点が話し合いの場でみられた。

2）ワークシートの分析

授業を行うにあたって、動画教材用のワークシートを作成した。そのワークシートを分析し、児童が、交流を行うにあたって大切にしたい項目は以下のようになった

表 3　日本の児童が大切にしたいと考えた項目

項目	大切にしたいと考える項目
1. 話し方	・声の大きさ、 ・目線
2. 聞き方	・反応
3. 内容	・伝わる内容を考える ・事前準備をする
4. 気持ちの伝え方	・ジェスチャーを使う ・表情を意識する

日本の場合は授業時間の関係で 4 つの項目にしか言及がなかったが、台湾の場合は 6 つの項

目すべてについてビデオクリップを視聴でき各項目について話し合いが持てた。その結果を表5に記載する。

表４　台湾の児童が大切にしたいと考えた項目

項目	大切にしたいと考える項目
1．話し方	・声の大きさ、 ・笑顔
2．聞き方	・反応
3．内容	・事前準備をする
4．情報の見せ方	・用意した紙を工夫して見せる
5．話しのつなげ方	・他に質問はないか聞く Do you have any question？
6．気持ちの伝え方	・ジェスチャーを使う ・表情を意識する

3-4　実際の zoom 交流の様子の分析について

実際の授業では、zoom のブレイクアウトを使って小グループごとに交流を行った。交流の様子は録画し、後で録画画像を見ながら分析を行った。

図４　台湾と日本の児童との小グループ zoom 会議の様子（左側：台湾　右側：日本）

表５「日本の小学生の行動からわかる教材の効果(n=28)

項目	大切にしたいと考える項目	児童の姿	%
1．話し方	・声の大きさ、 ・目線	大きな声でハキハキと話す	76%
		カメラ目線で会話している	76%
2 聞き方	・反応	相手の発言に反応している	76%
3．内容	・伝わる内容を考える ・事前準備	フリップや原稿などを事前に用意している	88 %
4．気持伝え方	・ジェスチャーを使う ・表情を意識する	身振りや手振り養生を使って相手に自分の感情を伝えている	73 %

日本については、教材の効果を感じる行動が多く見られた。（表 6 参照）特に、アニメや地域のことを紹介する際には、必ずイラストや写真を用いて説明しており、台湾の小学生も頷きながら交流を進められていた。また、台湾の小学生の話や質問に対して、「Nice」や「Good」など、さまざまなバリエーションの反応をしていた。また、食べ物の会話をしているということを理解して、「yummy」と反応したりしている児童もみられた。

非言語に関しても、手を振ったり相手の方を指したりして、交流できていた。このように、オンラインコミュニケーションについての授業で学習した項目については、積極的に自ら実践している児童が非常に多かった。また、困っている児童に手を差し伸べるような行動も多数見受けられ、グループで協力しながら交流をより良くしようとする姿勢がみられた。このような様子から、教材の効果は十分に発揮できていたと考えられる。

表６「台湾の小学生の行動からわかる教材の効果(n=22)

項目	大切にしたいと考える項目	児童の姿	%
1 話し方	・声の大きさ ・笑顔	大きな声でハキハキと話す	84%
		カメラ目線で会話している	68%
2 聞き方	・反応	相手の発言に反応している	73%
3 内容	・事前準備をする	フリップや原稿などを事前に用意している	100 %
4 情報の見せ方	・用意した紙を相手が見やすいように工夫して見せる	用意したフリップを相手が見やすいように工夫して見せる	47%
5 話しの繋げ方	丘に質問がないか聞く	質問を返したり、質問を求めたりなど、話をつなげている	0%
6 気持ちの伝え方	・ジェスチャーを使う ・表情を意識する	身振りや手振り養生を使って相手に自分の感情を伝えている	57 %

台湾の小学生は、「声の大きさ」「反応」「事前準備」に関しては多くの児童が実践できていた。しかし、事前に用意したフリップがカメラの画角に入っていなかったり、話をつなげる児童が非常に少なかったりした。

よって、特にこの 2 つの項目については、より深く分析・考察を行っていくこととした。

① 情報の見せ方についての分析・考察

フリップがカメラに見せられていなかった原因として、フリップの後ろに原稿が貼ってあったことが原因と考えられる。原稿を読もうとして下を向くとフリップも下を向いてしまい、カメラにフリップが映らなかったと分析する。しかし、以下の写真のように、フリップが下を向いてしまっていることに気がついて直してあげている児童の姿も見受けられた。このことから、筆者は、パソコンの画面だけでなく、その画面を大型テレビに映し出したりすることで、児童が自分の姿を客観視する機会を作り出すことが必要であり、児童が発表の様子を客観的に認識する手段が足りなかったのではないかと考察した。

② 話のつなげ方についての分析・考察

話をつなげる発言が、見られなかった原因としては、日本の小学生のリーダーシップが非常に高かったこと、そして台湾の教師の介入が多かったことが挙げられる。交流の様子を見ていると、日本の小学生が率先して自己紹介を始めたり、質問をしたりしていた。また、日本の小学生が「Do you have any question?」と台湾の小学生に質問を求めても、グループについている台湾の教師が質問し返したりしていて、台湾の小学生が話をつなげる場面がなかった。

これは事前打ち合わせで、この zoom 会議で児童のコミュニケーションスキルを高めるために、教師は極力手助けをしないという観点での意志一致が不十分であったというということに尽きる。zoom 会議をうまく運営することを目的とするのか、どこのレベルまで子どもたちの力で実行さるのかを事前打ち合わせが十分でなかった点にある。このことの合意がうまくとれていなかったため、結果的に台湾の小学生が話をつなげる機会がなかったと考察する。

このようなことから、Bad モデルではなく、話をつなげなくてはいけない場面を教材の中で多く設け、このような場合にはどんなふうに話をつなげれば良いのか考えさせる項目を作成する必要があると考えた。また、台湾で教材を実践してもらう際には、まず台湾の教師に指導案やワークシートなどの他に、教材のねらいを理解してもらうための資料を追加することで、より良いサポートが得られると考えた。

交流の分析･考察をまとめると、日本の小学生には､今回作成した教材は大いに有効であったということが明らかとなった｡一方､台湾の小学生には､｢話し方について｣｢聞き方について｣｢内容について｣｢気持ちの伝え方について｣の項目に関しては教材の効果は見られたが､｢情報の見せ方について｣｢話のつなげ方について｣の 2 項目に関しては教材の効果は十分ではなかったということが明らかとなった。

４．研究の成果と課題

実際に台湾と日本の zoom のブレイクアウト交流を行ってみて、「話し方について」「聞き方について」「内容について」「気持ちの伝え方について」の 4 項目に関しては、両国の実践できた児童数も多かったため、両国ともに、教材の効果が十分に発揮できたのではないかと考える。

教材についていうと日本と台湾とで共通に使えるオンラインコミュニケーションスキルのビデオ教材を作成したが、教材のみではその意図するところが台湾の教員にはよく伝わらなかった。特に今回の bad モデルの教材は、そこからどうすれば良いのかの改善点を話し合うところが重要であり、その意味で 6 番目の気持ちの伝え方のビデオ教材で、良い悪いの選択式の教材であれば、答えが明らかになるのでわかりやすい。日本では道徳の TV 番組を視聴した後で答えを話し合うことでそれぞれの思いを共有化するが、Bad モデルでは、その改善策の共有化が重要になってくる。

次回もし教材を作るとしたらの改善点としては、台湾の小学生向けの教材には、Bad モデルの他に、話をつなげなくてはいけない場面を教材の中で多く設け、このような場合にはどんなふうに話をつなげれば良いのか考えさせる項目を作成する必要がある。また、その場合でもオンラインコミュニケーションスキルを国際交流の zoom で育成するということを台湾の教師と意思一致しておく必要がある。

オンラインコミュニケーションスキルは今後ますます重要となってくると思われる。外国の同世代の児童と英語を使って意思を通じあうことは、日本語で行うことよりハードルが高いと思われがちだが、十分伝わらないからこそ、気持ちを伝えたり、タブレットやフリップボードを使ったりして補完できれば、それがうまくいったときの達成感はより大きなものとなるはずである。

私も２０２４年からは小学校教員として教育に携わるので、自分の作った教材で、自分のクラスの子供たちと国際協働学習を行いオンラインコミュニケーションスキルの実践を行いたいと思っている。

参考文献・資料

１）清水和久、紺野理子（2023）
「国際協働学習における主体的オンラインコミュニケーションスキルの育成」
金沢星稜大学人間科学研究　第 17 巻 1 号
２）矢野香（2020）
「オンラインでの『伝え方』ココが違います！」、株式会社すばる舎
３）野村絵理奈（2020）
「オンラインで伝える力」、株式会社ポプラ社
４）片桐あい（2020）
「オンラインコミュニケーション 35 の魔法」、株式会社自由国民社
・A.マレービアン著・西田司[ほか]共訳（1986）
「非言語コミュニケーション」、聖文社

作成した教材 URL
https://www.youtube.com/playlist?list=PLGRhQ0JRMKuQOrvCJkvbEV8Fdpannsy7D

大学生による小学校国際協働学習の支援の方法

～ユースプロジェクトとしての関わり～

金沢星稜大学　清水和久

日本の小学校６校 14 クラスと台湾の小学校４校 14 クラスとの国際協働学習の支援を行った。内容は６つ、１）導入時の「100 人村」ワークショップ、２）日本と台湾の教師間の LINE グループでのアシスト、３）台湾との TV 会議のための児童用の教材の提供と zoom 本番時のアシスト、４）大学生による台湾の交流小学校への訪問と 360 度カメラによる撮影、５）「帰国後の小学校での台湾報告会（含 VR ゴーグルのビデオ視聴）、６）月１回の大学生と日本の先生との情報交換会である。これらの６つのかかわりを通して両国の先生と児童に対して支援を行った。

キーワード　　テディベアプロジェクト　台湾　小学校　360 度カメラ　VR ゴーグル

1. はじめに

毎年、金沢星稜大学の清水ゼミの 3 回生が、JEARN のユースプロジェクトの一環としてテディベアプロジェクトに参加する小学校の支援を行っている。今年度の新たな取り組みは 2 点ある。１つはオンラインコミュニケーションスキルを育成するためのビデオ教材を開発し、視聴後に zoom 会議を行ったこと、もう１点は学生の台湾訪問時に交流校の様子を 360 度カメラで撮影し、小学校の報告会において VR ゴーグルで台湾の映像を視聴したことである。

学校の多忙化にともない、外国の交流相手校と時間をかけながら行う国際交流プロジェクトは実施が難しくなってきた。しかし、小学校での英語の教科化などで、英語を使う必要感を感じさせる場も必要となってくる。このような状況下で、膨大な労力をかけず、且つ自分のクラスの裁量である程度進めることができるプロジェクトが必要とされる。

JEARN のテディベアプロジェクトは、自分たちの代表としてぬいぐるみを送り、交流校からも送ってもらい、互いのぬいぐるみの滞在記を通して地域紹介や異文化理解を図るものである。ぬいぐるみをもらったあとは、そのぬいぐるみを通しての活動はある程度自校に任されており、過密なカリキュラムの日本でも自由度が効くプロジェクトとなっている。そのため交換した後は、内容は各校に任されているので自校のカリキュラムの中にうまく組み入れることは可能である。

相手との連絡も LINE グループの翻訳機能を使うことで英語が苦手な教員も大体の意思疎通はできる。またこの LINE グループに学生が担当者としてつくことで、会話の潤滑剤の役割を担うこともできる。

２．目的と方法

2-1 目的

日本と台湾の国際協働学習であるテディベアプロジェクトに大学生が関わり、両国の先生同士の交流を支援することで、大学生自体の学びと日本の小学校側（教師と児童）の得るものを明らかにする。

2-2 方法

1）両国の小学校と大学生との関係構造図

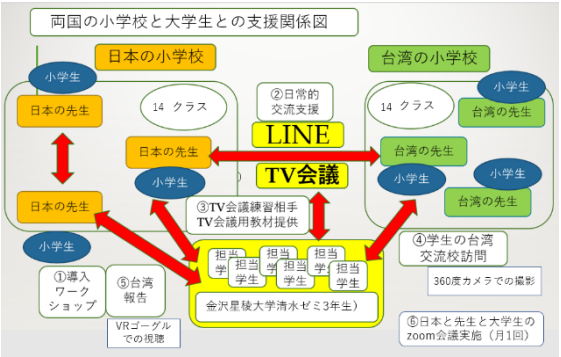


図１　小学校と大学生の支援関係図

上記の図の①から⑥に対応した６つの支援を行った。

① プロジェクト導入授業の実施

世界に対する関心を小学生に持ってもらうための大学生のワークショップの実施

② 日常的 LINE グループでの支援

日本と台湾のクラスごとのグループ LINE を作成し情報交換の場とし、担当の大学生も１名ずつ配置

③ 少人数 Zoom 会議支援

Zoom 会議のためのオンラインコミュニケーションスキルを身に着けるためのビデオ教材の作成と当日の支援

④ 学生による台湾の交流校の訪問

台湾の交流校に日本の小学生のクリスマスカードを届けるとともに、現地校を 360 度カメラ

で撮影する。

⑤　日本の小学校への台湾報告会の開催

台湾の訪問の様子をより理解してもらうために、VR ゴーグルを通して台湾で撮影した 360 度動画を視聴してもらい、臨場感を味わってもらう。

⑥　日本の先生と学生との zoom 会議

プロジェクト参加の日本の先生と、清水ゼミの学生（6 人）は筆者も含めて月 1 回 zoom 会議を持ち進捗状況の報告や課題についての情報交換会を実施

３．活動内容

6 つの支援項目を時系列に並べると以下のようになる

表１　年間活動日程

月	小学校児童の意識	教師の動き	研究会の内容
4 月	学習の見通しを持つ	国際協働学習の動機づけ	⑥月 1 回の研究会
5 月	交流相手の台湾について知る		第 1 回目顔合わせ
6 月	①100 人村ワーク体験	③ 交流校と LINE グループ作成	発信情報の蓄積方法の共有
7 月	発信内容の調査	地域情報の蓄積	
9 月	ペアの性格付けをして送付準備	台湾の交流児童との組み合わせ決定	第 2 回目：送り方見通し
10 月	台湾からペアの到着	ペアとの活動の話し合い	第 3 回目：ペアの活用法
11 月	③zoom 会議 1 自己紹介	TV 会議練習　大学生を練習相手に	第 4 回目：課題と解決方法
12 月	④大学生の台湾訪問 X'マスカード交換	英語のカード作成	第 5 回目 SDG s のテーマ
1 月	zoom 会議 2 発表会	SDG s 関係の内容について	
2 月	⑤大学生の報告会ペアの返却と帰国	振り返り	第 6 回目：振り返り

3-1　プロジェクト導入授業の実施

小学生が国際的なことに興味を持てるようにするために導入授業として「世界がもし１００人の村だったら」＊1のワークショップを大学生が小学校への出前授業としておこなう。大学生はいろいろな国の服装を身につけて、世界の富の偏りや識字率の問題などをクイズ形式でおこなう。参加する小学生は世界の住民になって指示に従って動く体験型のワークショップである。

図２　100 人村のスライドの１部

演じる学生の似顔絵を bit moji＊2のアプリで作成しスライドの中で使うことで、親しみやすくしている。世界で話される言語の種類としては人口の多い中国で話される中国語が一番多いのであるが、学校で学ばれる言語も入れると英語が一番多くなる事実から英語の必要性を理解してもらい、富の偏在では、人口の 20%の人が世界の富の８割を所有していることを学び、知ることの重要性を感じてもらった。このワークショップをきっかけに、台湾との交流をスタートさせるきっかけとした。

3-2　日常的な LINE グループでの支援

初めて国際協働学習を実施する先生にとって外国の先生とコミュニケーションがうまくとれるのかどうかが心配の種となる。LINE に翻訳アプリを参加させることで、日本語と中国語の変換が可能になる。日本の先生は日本語で打ち込むと中国語の訳も同時に作られるので、あまり言語の壁を感じることはなかった。やり取りの中で意味がうまく意味が通じてない場合には、大学生が間に入り英語で確認したりすることで誤解もあまりなかったように思う。筆者はすべての LINE グループはいってやり取りをモニターしていた。学生は自分の担当する LINE グループだけであるが、やり取りが活発になるように、何かが書き込まれると必ずコメントを返すことで先生同士のやり取りがスムーズになった。

何よりも日常的に使っている LINE なので、日常の出来事や写真なども構えることなく送りあっていたようである。

3-3　少人数 zoom 会議での支援

GIGA スクール構想により日本の児童は 1 人 1 台のタブレット端末を持っているので、zoom 会議もクラス全体体クラス全体の zoom 会議ではなく、物理的には zoom のブレイクアウト機能を使っての少人数の zoom 会議が可能である。

しかし、教師がすべてを同時に指導することは難しいので、先生がいなくても児童自身に話しを進めるスキルが必要である。Zoom でのやり取りにはオンラインコミュニケーションスキルが必要となる。今までは、小学生が台湾と zoom 会議を行う前に、同じ学校内の他のクラスと練習したり、時には大学生が練習相手となったりして zoom 会議の練習を行っていた。アドバイスすることは、声の大きさやカメラ目線、反応の仕方など鹿など、ほぼ毎回決まっているので、今回は zoom 会議のうまくいかない悪い見本としてのビデオ教材を作り、事前に見て改善点を話し合った上で少人数 zoom 会議をすることとした。教材は清水ゼミの 4 回生の平本美鈴氏を中心とした清水ゼミの学生が作り、実践を行った。なおこの教材は中国語の字幕付きのバーションも作り、台湾の児童にもわかる内容とした。

図３　日本語版（左）中国版の教材（右）QR コード

小グループ web 会議のメリットとしては１人１人の話せる時間が十分とれる。各自がその場で発言ができるので、発言のたびに web カメラの前に出てくる時間がかからない。メモを取りながら聞ける。より近くで相手の顔を見ることができるので相手の表情をつかみやすい。児童自身が何とか話をつなげようと努力する必然性が生まれる。

デメリットとしては、各グループの進行具合を教師が同時に把握できないので、小グループの中で会話が止まって児童が支援を求めている時に適切に支援ができない。そのため、児童自身が自律性を持て、会話の進め方や対応方法を理解しておく必要がある。

また、zoom 会議本番ではそれぞれのグループに学生が大学からオンラインで入り、話が滞った場合には、アドバイスを行った。詳細については平本美鈴氏のレポートを参照されたい。*3

3-4　大学生の台湾訪問

3-4-1 台湾の小学校訪問の日程と内容

訪問期間：2023 年 12 月 2３日から 2024 年 1 月 2 日。訪問者：筆者のゼミ生 11 名（4 年 5 名、3 年 6 名）大学の授業の関係で 4 年生 5 名は 23 日から先に台湾に入り、3 年生 6 名は 26 日から合流した。3 年生は交流担当校を 2 クラス持ち、昨年度訪問経験のある 4 年生は 3 年生の活動の記録係に回った。現地では交流校へ、クリスマスカードの手渡し、日本文化の紹介などを行った。そのほか、台湾の小学校の英語の授業参観や、台湾の小学校での VR ゴーグルの使用体験ができた。交流内容は、日本の文化紹介と日本の各小学校から託された学校紹介、及び質問であった。

○12 月 26 日　台北市五常小
　5 年 3 クラス・6 年 2 クラスとの交流
　英語授業参観、体育授業参観
○12 月 27 日　嘉儀市精忠小
　5 年 2 クラス・2 年 2 クラスとの交流
　英語授業参観・VR ゴーグル体験
○28 日 嘉儀市宣信小
　英語施設　　6 年 3 クラスとの交流
　英語授業参観・VR ゴーグル体験
　English センター（民族小）への訪問と体験
○29 日 高雄市新甲小
　5 年 2 クラスとの交流
　折り紙紹介・クイズ大会

どの小学校でも歓迎され、台湾の小学校英語の授業を実際に参観することができた。台湾では英語は専科が教えており、週 3 時間の授業が行われていた。基本、教師は英語で教えており、これから小学校教員を目指す大学生にとっても参考になるものであった。

3-4-2　台湾の小学校での大学生の発表

大学生は各交流担当クラスに入り、日本文化についてのプレゼンや、日本の小学生から聞いてきた台湾の小学生への質問等を英語でおこなった。紹介の様子はビデオで録画してあり、帰国後日本の小学校で上映予定である。

3-4-3　台湾紹介の 360 度ビデオクリップの作成

台湾での大学生の体験を 360 度カメラで撮影した。有名な観光地である九份十份を訪問した様子や台北市のカウントダウン花火等も録画することができた。

また高雄市の新甲国民小学校では、校門で歓迎される様子やスクールツアーなどの映像を日本のこどもたちが VR ゴーグルを使って視聴することで 360 度の臨場感のある映像を見てその場にいるような追体験ができる。

今回訪問した精忠小、及び宣信小の 2 校では VR ゴーグルが 20 台配備されており。英語や情報機器の面で進んだ台湾の教育の一部を知ることができた。

図４　台湾の小学校での VR ゴーグル体験

3-5 日本の小学校で台湾報告会

大学生は自分の担当校での台湾の訪問時の様子のプレゼンを行った。VR は 5 台しかなかったので、比較的 1 クラスの人数の少ないクラスでは順番に VR ゴーグル体験をしてもらい、台湾で撮影した 360 度動画を見せることができた。ほとんどの児童がＶＲゴーグルは初体験であり、見た映像にその異世界まるでその場にいるような体験を楽しんでいた。

また VR ゴーグル（Metaquest2）のアプリの Wander はグーグルマップのストリートビューを全方位で見ることができる。そのため交流している学校の周りを実際に歩きまわる疑似体験もできるため、より訪問感を高めることができる。また、本人が見ている VR ゴーグルの画面はミラーリングで外部モニターにも同時に投影できるため、周りの人も一緒に歩いている雰囲気を味合うことができる。

図５　VR ゴーグルでの台湾旅行追体験経験

3-6 参加の先生方との研究会

表 1 にも示したように、年間 6 回の研究会を筆者、大学生及び現場の教師間で行って来た。この研究会の意図は、交流の進捗状況の把握と大学生と担当小学校の先生との意思疎通の確認を目的とした。前には実際会っての会合であったが、現在は多忙のこともあり zoom で勤務時間内に行っている。

継続的な会合は、各学校の進捗状況を互いに知り、交流がうまくいっていない小学校が、他校の様子を参考にできるようにするためである。全体会の後はさらに小学校別に分かれて先生と担当の学生が話し合い、今後の小学校での要望を確認した。

クラスによって日本や台湾の先生の対応もまちまちであるが、相手からうまく反応が返ってこなくても、日本側が継続的に働きかけ、LINE などの書き込みに対しては、読むだけでなくスタンプを返すなどもアドバイスした。

それぞれの先生の背後には交流に期待しているクラスの児童がいることを忘れずに、交流がうまくいっていない場合には、交流活性化の対策を話し合い、筆者の方から台湾の先生に連絡を取ったり、大学生にも LINE での会話が弾むように「潤滑油」的役割を高めるように話したりした。

４．まとめ

4 - 1 支援にかかわった学生に観点から

今回の交流のメインの役割を担った 3 年生は、6 月から小学校へ出向いてのワークショップから始まり、台湾と日本の先生との LINE グループで交流の動向をサポートし、台湾と日本の子ども同士の WEB 会議にもネット上で立ち会い、12 月末に台湾の交流校を訪れて、台湾の子供たちにメッセージを伝えた。ずっとサポートしてきた台湾の子供たちと実際に会いプレゼンができたことは、バーチャルでの交流が現実となり、これからの教員として歩む上での大きな自信につながったはずである。

この研修で学んだことを 3 年生にあげてもらうと。1 位：台湾の英語教育の先進性（9 名）、2 位：3 年生 4 年生間のつながり、3 位：コミュニケーション力アップ（4 名）、異文化理解の大切さ（4 名）であった。

台湾の実用的な英語教育の先進性を感じた学生が多かったようである。また 3 年生は海外旅行が初めての学生が多く、プレッシャーを感じる中で協力体制の重要さを感じたようである。いずれもこの経験は、学生が教員になった時に子供たちに話すことのできる生きた教材となる。

表 2　項目別支援を行った大学生の学び

	項目	支援を行った学生の学び	小学校側の得たもの（教師、児童）
1	100 人村ワーク	・国際情勢の理解 ・ワークショップの企画力 ・児童の前で演技する力	・国際情勢の理解 ・英語の必要性の理解 ・外国への興味の拡大
2	LINE で会話	・交流の進行状況の把握 ・会話に対する反応力	・日常的に日本の教師が外国の教師と協働する力 ・外国に対する発信力
3	Zoom 支援	・オンラインコミュニケーションスキルの理解と教材作成力 ・zoom での支援的立場からの介入の方法	・オンラインコミュニケーションスキルの必要性の理解 ・タブレットの活用場面 ・児童が臨機応変に zoom 会議を実行する力
4	台湾訪問	・日本文化のプレゼン力 ・外国の地での対応力 ・360 度動画の編集力 ・対面での英語の会話力	・台湾に行く学生に託すミッションの作成 ・台湾への興味の拡大
5	台湾報告会	・台湾の紹介プレゼン ・VR ゴーグルの視聴の仕方の説明	・大学生の台湾の話の理解 ・VR ゴーグルでの台湾訪問疑似体験
6	月 1 の会合	・担当の校先生との良好な関係 ・詳細な打ち合わせ	・台湾との交流の見通し ・クラス活動の見通し

4 - 2 全体を通して

小学校においても、学んだ英語を必然性のある環境で使って自分の意思を相手に伝えたり、相手の意図をくみ取ったりする力は重要になってくる。Web 会議に前にオンラインコミュニケーションスキルの在り方について考えることは必要であり、そのためのビデオクリップ教材であった。そして、実際の少人数での WEB 会議の経験を通すことで、そのスキルを実証し身に着けることができた。

またオンラインの国際交流を補完するものとして、実際に相手を実感できる物（ぬいぐるみ等）が必要であり、自分の思いを託せる人（大学生）の直接交流体験を聞くことで間接的に異文化理解の質を高めることにつながると感じた。

参考文献

１）「ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら」第 6 版　開発教育協会　2020
２）bitmoji　https://www.bitmoji.com/
３）平本美鈴・清水和久
「オンラインコミュニケーションスキルのための教材開発」　国際協働学習　iEARN レポート（2024）
https://jearn.jp/iearn-report/index.html

その他のプロジェクト

ANNE FRANK Meet and Learn

Project Facilitator　高木洋子

ANNE FRANK パネル 34 枚は、アンネが皆さんに会うために日本にやってきました。戦争の悲惨な現状を知り、未来への課題を考えるきっかけとなりますように

巡回展示用大型パネル　日本語と英語での説明

1. はじめに

アンネが隠れ家の生活で書いた「アンネの日記」。日記には過酷な逆境にも明るく力強く生きる姿勢が記され、何十年たっても人々に感銘を与え続けている。アンネが 15 歳で亡くなった頃、5 歳だった私は、旧満州でソ連兵に銃で脅され、恐怖の日々を過ごしていた。アンネの日記を読んだ時、他人事ではないと思い、後日、アンネフランクパネル展アジア担当の Stefan 氏から 15 回続いた日本に於けるパネル展の継続を依頼され、以後、現在の 123 回に至るまで続けている。その間に、アムステルダムのアンネフランク・ハウスへ、アウシュビッツへ、アルゼンチンのアンネフランク・センターへと訪問をし、アンネへの思いを深めてきた。

2. 目的と方法

2-1 目的

ANNE FRANK のパネルを希望者に貸し出し、戦争の悲惨な現状を知り、未来への課題を考えるきっかけとする。

2-2 方法

JEARN の関連団体プロジェクトとして ANNE FRANK Meet & Learn が認証され、ウエブ担当浅川氏、経理・事務担当杉本氏、進行を高木が進めている。大型パネル 34 枚（縦 196cm、横 90cm）の他、関係する本やビデオ等一式があり、開催ご希望は、高木宛に連絡をいただきたい。連絡先：yoko@jearn.jp

小・中・高校・大学を中心に地域の図書館・公民館・教会などで開催され、開催地から次の開催地へのパネル一式移動に関する費用は在東京オランダ大使館の助成金で、開催終了後には日・英による開催内容報告・展示会場写真・生徒や訪問者による感想の提出が必要。全て次のサイトに掲載されている：

以下のサイトを参照

GCPEJ 平和教育地球キャンペーン

https://gcpej.jimdofree.com/link/annefrank/

3. 活動内容・研究内容

表 1　2023 年度の開催実績

	日時	開催地
1	2 月	仙台市立上杉山中学校
2	3 月	長崎図書館郷土資料センター（NPO Conpeito 主催）
3	7 月	日見中学校（長崎）
4	8 月	日進市立図書館（愛知県）
5	8 月	ギャルリグレグ八が岳（Yogiyogi-Lily 主催）
6	10 月	青山学院大学（東京） 青山キャンパス「青山祭」
7	11 月	川北町立川北中学校（石川県） 主催：川北町教育委員会

図 1　各地の展示会の様子

各開催地では、パネル展に関連した企画も同時に実践された。特に、川北中学校では、ホロコースト教育資料センター理事長による講演会「ハンナのかばん」や、道徳授業「アンネのバラ」なども同時に開催され、展示会との相乗効果があったとの報告もされた。

4. 成果と課題

〇成果

生徒たちの感想文を読むと、ANNE と当時の歴史を重ね、また現在の世界情勢と合わせ、教科書で知る知識とは異なった現実感があるように思う。皆さんのご協力を得ながら、今後も継続していきたい。

〇課題

毎回、ANNE FRANK のパネル展の開催希望があるかの不安が消えません。一年に 10 回の開催を予定しているが、なかなか思うようにならない年も多い。多くの子ども達・生徒達がアンネに逢える機会を作ってほしいと願っている。

国際協働学習 iEARN レポート
2024 年 6 月 1 日発行
出版元 NPO 法人 JEARN
https://jearn.jp/iearn-report/index.html
ISSN 2434-0049